
小夜啼鳥の昔語り

小春月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小夜啼鳥の昔語り

【Nコード】

N1737G

【作者名】

小春月

【あらすじ】

ある日。急に語り始めたナイチンゲール小夜啼鳥。調づことを至福とした小鳥の、昔語りです。

(前書き)

自分が書きたいものを、ということを書いてみたものです。

貴方様。どうかお聴きくださいませ。

ナイチンゲール
小夜啼鳥の愚かな昔語りを。

わたくしは国から国を飛び回っていました。

とある旅の一座の花形でございました。

行く先々で、わたくしは小さな銀の鳥かごに入れられ、
目を輝かせる人々のまえで、詞っていたのでございます。

もちろん、わたくしの詞は最後の最後。

とつとき、というものにございましょうか。

わたくし自身、わたくしの詞に並ぶ存在がこの世あるはずもない、
とっておりました。

今思い返せば、それは重い罪だったのございましょう。
しかし、

驕った気持ちで詞えど、人々はわたくしの声に感嘆の息を漏らし、
呼吸を継ぐことすら忘れるのでした。

わたくしにとって、それはとても気分の良いことだったのでござい
ます。

日々、ただ詞い、ただ奏でるだけで幸福だったのでございます。
わたくしは野にある友とは一線を画する、特別な存在だと驕ってお
りました。

久遠の時を、そう過ごすものだと思っておりました。

ところがです。

ある時、わたくしの全てが崩れ去ってしまったのです。

始まりは、とある貴族の領地に参った時でございます。

領民の限られた楽しみになってほしいと請われ、一座の主はカタコトと馬車を走らせるように命じました。

もちろん、わたくしは一座の主の手元。銀の籠の中におりました。

野道に行く馬車の中。銀の籠から見える風景は、やはり格別のものがございます。生まれてこの方、一度も空を掴んだことのない翼を動かしました。

なんと、すばらしいことでしょう。ふんわりと宙に浮く感覚をわたくしは初めて体験したのでございます。

わたくしは野を耕す民を楽しませ、その労をねぎらうために詠いました。

やはり、民の間より漏れいずる感嘆の声に、小さな我が身をふるわせました。

なんと、すばらしいことなのだろう！

わたくしの詞を聞き慣れた一座の者ですら、感嘆の声をあげたのです。

そのとき、わたくしがなにを思っていたかなど、人間の身にはお分かりになりますまい。

このとき、わたくしは初めて翼で空を掴んでみたいと思ったのでございます。

その翌日のことでした。
わたくしたちを招請した領主の前で、諷うことになりました。
もちろん、わたくしはいつものように諷いました。

いくつもの村を歓喜の声で包み、いくつもの国を感嘆の息で包んだ
わたくしの詞でございます。

領主は、ひどくわたくしの詞を気に入ったようでした。

そして、あろう事かわたくしを望んだのでございます。

なんと！ なんと、欲深なことでございます。今となってはそ
う思います、

領主に望まれたとき、わたくしはやはり嬉しかったのでございます。

しかし、一座の主は渋りました。

わたくしがいなくなれば、一座を続けてはいけない、と。

しかし、領主は一座の主を説得したのでございます。

当時、城にも勝る宝と言われたチューリップの球根、砂金がたっぷり詰まった袋を二つ。一座の主に渡したのでございます。

一座の主も、とうとう折れました。

わたくしは、小さな銀の鳥かごとともに旅の一座を離れ、領主のもとに残ったのでございます。

わたくしを得た領主は、腕の良い金細工師に、金の鳥かごを作らせました。

良き声で啼いておくれ、と甘い夜露もくれました。
毎夜毎夜、小さな金の鳥かごを寝台のよこに置き、わたくしの詞を
聞きながら休まれていました。

しかし

美しい、すばらしい、と何度も言ってくれたのは、最初の頃だけで
ございます。

やがて領主は、わたくしの詞に飽きられました。

わたくしは、金の鳥かごに入れられたまま、客間に置かれること
なったのでございます。

もはや、わたくしの詞を聞いてくれる人間はいません。わたくしの
詞を、美しいと言ってくれる人間はいないので。

それはそれは、寂しゅうございました。この世が、暗闇に包まれて
しまったように、思いました。

ですが、いたのでございます。

すばらしい調度の品にかこまれて、金の鳥かごの中で寂しく詞って
いるわたくしを。寂しく聞こえるわたくしの詞を。

美しい、すばらしい、と言ってくれる人間が。

それは、お屋敷に仕えるメイドでございました。

まだ若く、奉公に上がったばかりであろうと思われる年の頃です。

赤茶の髪をきつく結び、大きな瞳は寂しさに霞んでいました。ささ
くれだった指は、堅く組まれておりました。

わたくしは、思ったのでございます。

この娘のために詞いたい、と。

初めてでございました。誰かのために詞いたい、と思ったのは。

小さな金の鳥かごの中。訝ったのでございます。最初は、ちいさなちいさな声で。

そのときの、メイドのはつとした顔を、いまでも覚えております。

霞んでいた瞳には、どんなものよりもはげしい色が浮かび、けつしてやわらぐことのなかった口は、するりと緩み。

堅く組んでいた手を、わたくしが入っている金の鳥かごに伸ばしたのどございませぬ。

ああ。お笑いください！

わたくしは。わたくしはそれを、なんとすることもございませぬでした。

はげしく啼きわめけば、きっと誰かが駆けつけてきたことございませぬでしょう。

きっと、メイドの手からわたくしを取り返してくれたでしょう。

しかし、

わたくしはなにもしなかつたのでございませぬ。

金の鳥かごは娘の手の中で激しく揺れ、わたくしは啼きもしませぬでした。

あなたは、こんな籠の中で訝っていてはいけません。

そう、娘は言ったのでございませぬ。

あなたは、こんな籠の中で飛んではいけない。

そう、娘は言ったのでございませぬ。

次の瞬間。

わたくしの目の前に、扉が開きました。

鳥かごの中で過ごしてきたわたくしにとって、初めての出来事でございまして。

鳥かごが、ぱっくりと口を開けているのでございます。

野にある仲間が、わたくしを呼んでいるのでございます。

ああ！わたくしはなんということを！

わたくしは、籠の中を飛び出したのでございます。

詞を詞い、日々籠の中にいたわたくしが。

わたくしの中を吹き抜ける風の言うことに従って、小さな翼を広げたのでございます。

もう、銀の鳥かごにも、金の鳥かごにも戻れぬことを承知しておきながら。

遙かな地上で、娘が目を見開いているのを見ながら。

わたくしは詞ったのでございます。

空を掴む前、わたくしの世界は籠の中でした。

小さな鳥かごの中だけだったのです。

いまは違います。わたくしの目の前には、どこまでも広い空が続いているのでございます。

わたくしは、そのまま飛び去ってしまいました。

しかし、

そんなことをすれば、わたくしを空に放った娘はどうなるでしょうか。

きっと、領主からきついおしかりを得ることでしょう。

そんなことはいけない。戻らなければいけない。

そう思いながらも、わたくしは。わたくしは。

わたくしを空に放った娘を置いて、空へと逃げ出したのでございます！

もはや、娘のことなど頭の片隅にもありませんでした。

それは、わたくしが犯してきた罪の、どれよりも重いものなのでしよう。

嘆くのは、愚かなことにございます。

悔やむのは、愚かなことにございます。

お分かりください、貴方様。

わたくしは、小夜啼鳥なのでございます。

わたくしは、空を飛ぶ鳥でございます。

空を飛ぶことが、なによりの幸福なのでございます。

調うことよりも、奏でることよりも。

後になって、わたくしがあの娘のことを思い出したときには、

あの娘の行方はけっして分かりませんでした。

それでも、わたくしは調い、空を飛ぶのでございます。

だって わたくしは、愚かな小夜啼鳥でございますから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1737g/>

小夜啼鳥の昔語り

2010年10月31日04時23分発行